岩獣会報 (Iwate Vet.), Vol. 24 (No. 1), 12−17 (1998).

資　料

「発展する中国と砂漠の中の大学」第7回中国獣医病理学会参加報告(1)

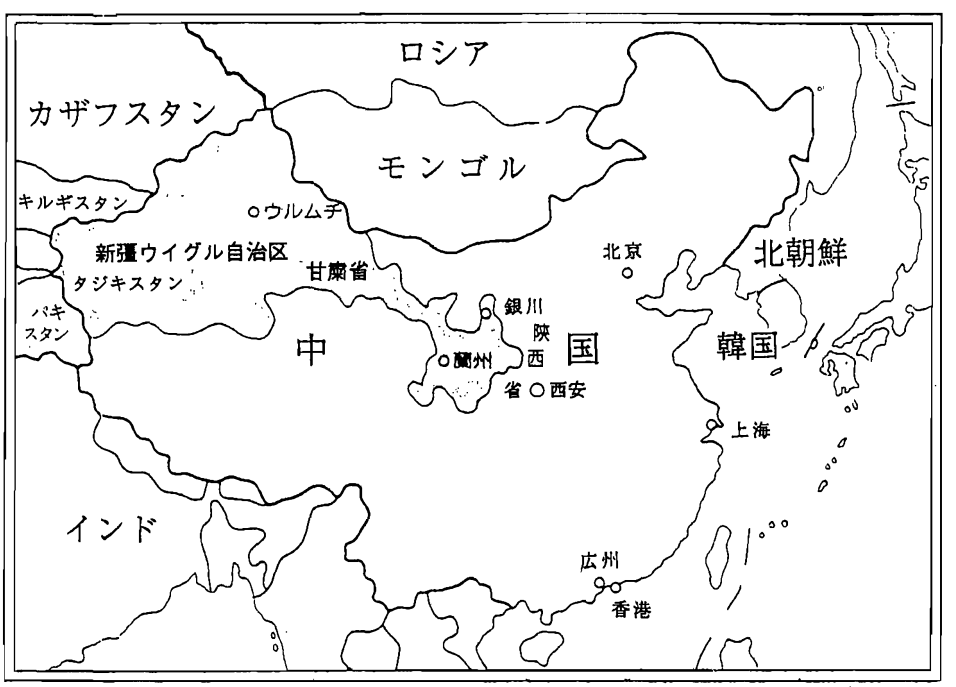
岡　田　幸　助

この度，中国獣医病理学会の招きで，中国農牧大学とタリム大学を訪問したので，報告する．

1．中国獣医病理学会

8月25日13時25分北京着の飛行機で板倉智敏北海道大学名誉教授と共に北京空港に到着した．先に中国に渡った吉川　尭北里大学教授，吉川博康助教授，王長春農牧大学教授，パン（潘）さん，イン（尹）さんの出迎えをうけた．長春農牧大学差し向けの軍の車にて北京市内にある中国農牧大学の宿舎に向かう．

夜は早速，中国獣医病理学会理事長招待の歓迎会が準備されていた．中国病理学会は華北，西，南，東，中の5支部からなり，それぞれの代表者が集まっていた．すなわち朱理事長，宋文成洛陽農業大学教授，劉　恵貴ハルピン大学教授，王　水琴長春農牧大学教授，許　楽仁貴州農学院教授，通訳の趙　徳明中国農牧大学助教授で，日本側は板倉名誉教授，吉川　尭教授，吉川博康助教授，岡田である．ほとんどの先生方と私は1993年に貴陽で開かれた前々回の



岡田幸助：岩手大学支会，岩手大学・農学部・獣医学科・家畜病理学教室教授

学会以来4年ぶりの再会で，旧交を暖めることができた．

8月26日　学会は大学構内の講堂で開かれた．学会出席者は167名，チベットから来た先生もあり，海南省以外のすべての省から出席者があった．チベットから北京までは1週間以上かかるという．我々よりはるかに時間をかけて学会に来ていることになり敬服の限りである．

開会式では板倉団長や各代表者が挨拶した．式の後，少し時間があったので，今年6月に卒業したばかりのインさんの案内で実験動物研究室棟と診断センターを見学した．予約なしで突然訪れたにもかかわらず，いずれの施設でも日本留学経験者と出会った．彼らが研究室内を日本語で案内してくれたのでわかりやすく大変参考になった．日本で勉強して，帰国した方々が中国で活躍しておられるのを目の当たりにしてうれしくなった．実験設備としては非常に高額な最新の顕微鏡や検査機器が揃っていて驚いた．これらの機器は日本の大学でもあるのが珍しいほどで，どうしてこんなに高額のものを買えたのだろうと思ったが，聞くと世界銀行からの援助で購入されたものだという．但しまだ使い込んでいるという様子ではなく，これからの活躍が期待される．午後からの講演では板倉名誉教授が「皮膚型マレック病」について，岡田が「牛白血病」について，吉川博康助教授が「病理組織における牛白血病ウイルス遺伝子の検出」について講演した．最後に台湾から招待された林　茂勇屏東技術学院教授により「鶏の病気」についての講演があった．夜は中国農牧大学学部長招待の歓迎会が開かれ，カラオケを楽しんだ．

8月27日　北京動物園を見学した．お馴染みのパンダを始め，天山山脈にしかいないという白豹を見ることが出来た．夜は宿舎に張　旭静先生（西海農牧大学助教授，1982～1985年まで岩手大学に留学）とこれから岩手大学に留学希望のパンさんとインさんが相談にやって来て，長時間話しをした．

8月28日　午前7時，中国病理学会の方々とお別れし，新橋ホテルに向かい，そこに滞在している吉川教授の御長女の愛（めぐみ）さんや北里大学博士課程院生の吉岡一機君と合流した．午前は西単百貨店で買い物，老舎茶館で昼食をとり，中国の民族音楽を鑑賞した．秀水市場で妻へのお土産として絹のパジャマを購入した．北京の街は道に車，人，自転車があふれ，またそれらの調和が絶妙で，車が来るのに堂々と道を横断する人を見て感心した．中国は4年前から比べると大変な発展で，服装も派手になり，商店に並べてある商品を見ても，日本とほとんど変わらなくなっていた．

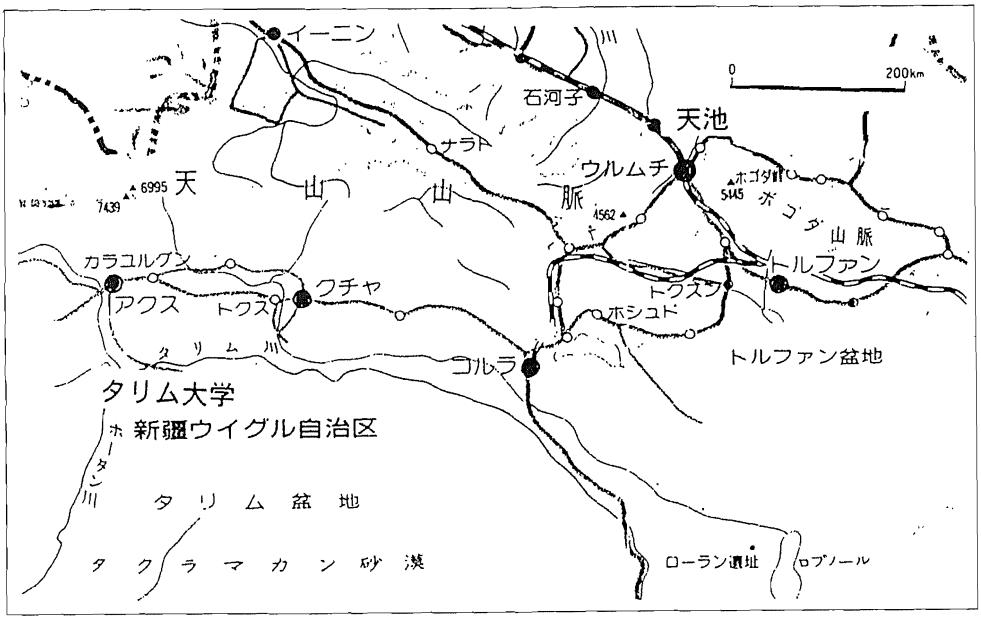
夜は長春農牧大学学院の友人である劉　蘭芳（会社社長），朗（音楽の教授）夫妻の招待により鯉魚門ホテルで現在岩手大学工学部に留学生として来ている景さん一家と共に食事をした．朗教授は声楽が専門だそうで，「オーソレミヨ」を歌って下さった時はその声量にホテルの窓ガラスが震えるほどであった．

2．ウルムチ空港と天池　中国は広い

8月29日　本日，景さん（岩大留学生）が日本に帰り，私達はウルムチに向かうので，景さん一家と一緒に空港へ行くこととなった．空港の近くのレストランで昼食をとった．席につくとウエーターが口の長いヤカンを持ってきて離れたところから上手に客の前にある茶碗の中にお湯を注いだ．茶碗の中にはなつめ，菊の花，氷砂糖などが入っていて，しばらく置いてからフタを少しずらしてお茶をいただく．大変おいしく，これを三宝茶というのだそうだ（写真1）．

写真1　三宝茶に口の長いヤカンでお湯を注ぐ

さて空港で陳タリム大学副校長，王教授，銭教授，趙助教授と合流し，一行は9名になった．北京空港から4時間，ウルムチに夕方7時頃到着した．ウルムチの気温は15度，北京では35度であったから非常に寒い．空港にいる皆はセーターやジャンパーを着ている．恥ずかしいことに私は半そでに短パンで，内心失敗したと思った．しかし，服はスーツケースの中にある．空港ではそれを取りだすことも出来ないので，そのままタリム大学から迎えに来た2台の車に乗り込んだ．1台はランドクルーザー，もう1台はマツダのマービーで共に日本車である．車の中で陳先生から新疆ウイグル自治区の説明を聞く．人口は1,800万人，面積は中国全土の1／6，ウルムチ市の人口は180万人，綿花の基地で，畜産は全国2位，牛，綿羊が主である．また石油の基地でもある．寒暖の差が大きいので西瓜がおいしいという．ふと時計を見ると午後の8時，不思議なことにまだ明るい．緯度が高いわけではなし（岩手県とほぼ同じ緯度），これは一体どうしたことか．種を明かせば中国全土で北京時間を使用しているためであった．ウルムチは北京から西方に3,000km離れているので，2時間も時差があるのである．本当はまだ6時，やっと合点がいく．阜康市で夕食のため車が停止したので，早速スーツケースを下ろしてもらい，セーターとジャンパーを着る．これから天池へ行くという．そこは標高5,000mと聞いたが，あとで山の高さが5,000m（正確にはボゴダ山5,445m）で，天池はその中腹2,000mのところにあることが判明した．真っ暗な中，車に揺られて深夜の11時やっと目的地の天地に到着した．今晩はパオに泊まる．床には絨毯が敷かれ，壁にも絨毯が張り付けられていた．中



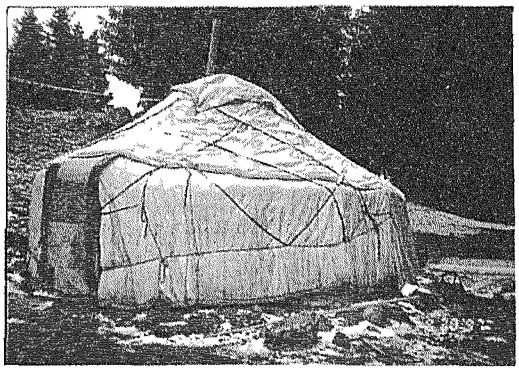


写真2　パオ（天池）
あたりには雪がうっすらと積もっている

には石炭ストーブがあり，暖かかった．陳先生が馬乳茶を配ってくれた．ミルクティーのようでおいしい．これは心臓病に良いという．一同布団にくるまり雑居寝をする（写真2）．

8月30日朝起きてみるとずいぶん寒い．外にはなんと雪がうっすらと積もっていた．昨日までの北京の暑さを思うと，うそのようである．

天池は水深120mの小さな湖で，霧が立ちこめていた．それが晴れると湖面の向こうに万年雪を頂いた5～6,000mクラスの険しい山々が現れ，まるでアルプスの景色のようであった．これが天山山脈である（写真3）．

昼食に陳先生はシシカバブを御馳走してくれた．これは長さ40cmの金串にサイコロ大の羊の肉が5・6個挿された焼き鳥の様なもので，独特の香辛料がきいていて非常においしい．私たちのために23kgの小羊が犠牲になったそうで，肉も非常に柔らかい．そういえば先ほどパオの外で，根元に血の付いた樹木と，そこに小羊の頭が転がっているのを見た．

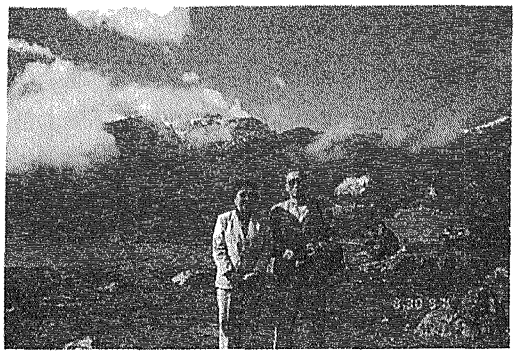


写真3　霧のかかる天池にて　王教授と銭教授

3．トルファン

午後から我々はトルファンへ向かう．ランドクルーザーの運転はヤン（楊）さんといってタリム大学の事務主任，マービーの運転手はモ（莫）さんである．陳副校長によるとランドクルーザーは70万元で購入したそうで，日本で買うよりずいぶん安い．それにしても中国でこんな高級車を買えるということは，タリム大学はお金持ちだなと想像した．

トルファン盆地はマイナス154m，先ほどまで標高2,000mの所に居たのだから，ずいぶん下がっていくものである．運転手は既に半そでのシャツ1枚，これから暑くなるということか．道端で哈密瓜（ハミ瓜）を3個，3元で買った．早速，食べてみたが，甘さはいまひとつ．街道沿いに「日本旧戦胎」と書いた看板の店があった．これはどういう意味かと聞くと，「日本の古タイやあります」ということであった．中古でも日本の製品は良いらしい．トルファンには20時50分に着いた．例によってまだ明るい．どの家も2階の壁にはレンガを組み合わせて無数の穴が開いている．これは葡萄を乾燥させるためだそうだ．さすが葡萄の産地で，自動車の通る道にも葡萄棚を渡してアーケードを作っている．街はよく熟した葡萄の甘い香りで満ちあふれていた．先週まで葡萄祭りだったそうで，まだその飾り付けがそのまま残っていた．中国の地方では日本のように電話でホテルを予約しておくことは出来ない．したがってホテルのフロントまで行って今日泊まれるかどうかを尋ねなければならない．まだ観光客が残っているため

どのホテルも満員であった．町の中にある3軒のホテルは全てだめで，楊主任はホテルを見つけるのに苦労していた．やっと町外れにホテルが見つかった．名前は石油ホテルといってホテルにしてはおかしな名前だなと思ったら，石油の会社が経営しているということであった．早速シャワーを浴びようとしたらお湯が出ない．私は水をかぶって済ませたが，同室の趙さんは「冷たいのによくかぶったものだ」とびっくりしていた．ホテルの玄関の黒板に「慶71」の文字が書かれていた．これは7月1日に香港が返還されたことを祝うの意味で，中国人がこの返還をいかに喜んでいるかよくわかる．

8月31日　毎日，毎食，中華料理でやや食傷気味，そこで朝食抜きで朝7時に出発することにした．ところがホテルの玄関にカギがかかっていて外に出ることが出来ない．フロントにも誰もいない．皆で大声で叫んだところ，やっと女子接客員が目をこすりながら出てきた．我々には7時でも彼女らにとっては5時なのだからしょうがない．ホテルを出発してからしばらくして日の出，7時40分であった．途中石油の井戸掘りや，風力発電の風車群を見ることが出来た．このあたりは本当に資源が豊富だなと思った．後ろの車（マツダマービー）がパンクしたので，スペアタイヤと取り換えた．どこかでパンクしたタイヤを修理して目的地を目指すことにした（写真4，5）．

最初に火炎山に着いた．西遊記に出てくる山で，午後からは夕日で真っ赤に染まり，この名前がついたそうであるが，我々が着いたときは，早朝であったので，逆光で日陰になっていて暗く赤い山は想像するだけであった．山腹に小さな穴が沢山開いていたが，これは小動物の巣だという．このような草一本もないところにも，生物は居るのだなと感心した．すぐ近くに千仏

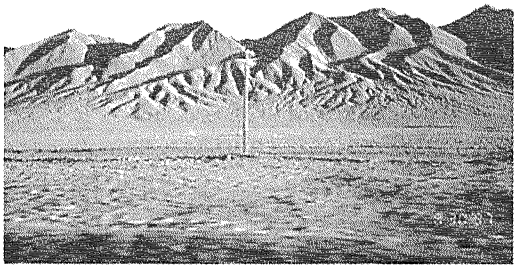


写真4　シルクロード（トルファン）

写真5　片道1,200kmを運んでくれたランドクルーザー

洞があった．いくつもの洞窟に仏像や仏画が描かれていたということであるが，ほとんど何もない．その理由の一つにはイスラム教徒による宗教上の破壊，次は世界中からの探検隊による略奪によって廃虚と化していた．壁には漆喰の切り取られた跡が無残にも残っていて，岩肌が見え痛々しい．そういえば昨年，ロンドンの大英博物館で多数の仏像や仏画を見たが，このようにして持ち去られたものだなと合点がいった．

葡萄博物館では新疆にある600種の葡萄のうち100種をホルマリン漬けで展示していた．色も変わらず保存され，かつその種類の豊富さに驚いた．葡萄園で食事をしたが，小さな女の子がまめまめしく働いた．また別の男の子は踊って愛嬌を振りまきながら，一生懸命呼び込みをしていた姿は忘れられない．北京では男性が食事を作ったり，洗濯するのはあたりまえ．しか

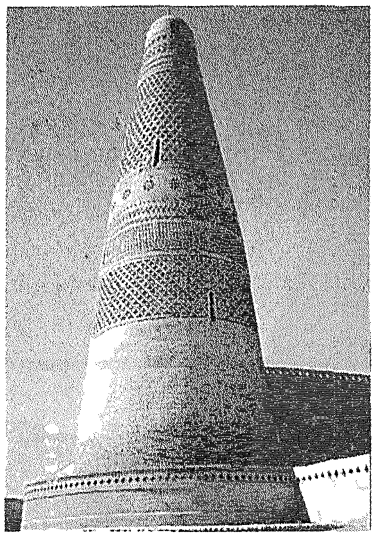


写真6　蘇公塔

しここでは様子が異なり，女の人がよく働いていた．趙さんによると中国には「ウイグルの女性よく働き，男性はお茶を飲むだけ」という言葉があるそうでどこかの国と似ているかもしれない．

昼食後，蘇公塔を訪ねた．この塔は蘇という王様が1777年に建てた高さ44mのレンガ作りの塔で，その幾何学的なモザイク模様が素晴らしかった（写真6）．

次に交河故城を見学した（写真7）．漢の時代，今から1,700年前，紀元2世紀に栄えたのこの地方の都であったところで，両側を深い谷で挟まれた，城というよりも台地の上に作られた土でできた家々からなる街である．紀元450年に滅亡し，その後廃虚となった．半地下都市で，当時6,000人が住んでいたという．台地に形成された街は奥行き1,760m，広さ43万m²で，そこに土で作られた家の壁だけが残っている．無数の建物があり，その総建坪36万m²という．

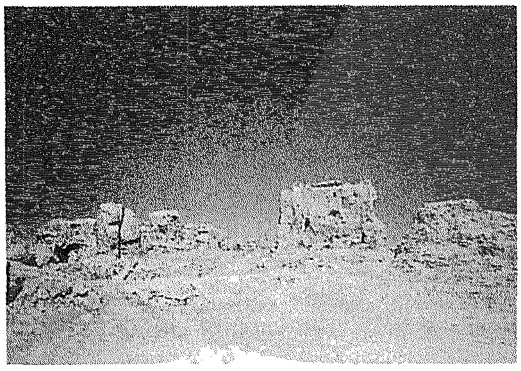


写真7　交河故域

内部は寺院，居住区やオフィス街などに分かれ，200人もの子供の墓が集まった墓地もある．年間降雨量は16mmしかなく，乾燥していてとても暑い．ここは中国で一番暑いところだそうだ．現在の気温がどのくらいか分からないが（多分40度に近いと思う），これまでの最高気温は49度，その時地表では82度あったそうだ．家の奥には深さ30mの井戸があり覗き込むと，真っ暗な底の方に確かに水が見える．これまでにこの遺跡を世界遺産に申請したそうであるが，採択されなかった．理由は風による侵食が激しいので永久に保存する保証が出来ないということらしい．入口の看板を見ると，ユネスコや日本政府が遺跡の保存に資金援助していることが書かれていて少し安心した．昨年の観光客は200万人で，内日本人が一番多いという．見学中そんなに人影を見かけなかったのでこの数字は信じがたい．以上，ガイドさんが中国語で案内してくれて，それを正確に趙先生が通訳してくれたので，よく分かったが，もしガイドさんなしで勝手に歩いていたら気のつかないことが一杯あったと思う．

（つづく）

岩獣会報 (Iwate Vet.), Vol. 24 (No. 2), 53－57(1998).

資　料

「発展する中国と砂漠の中の大学」第7回中国獣医病理学会参加報告(2)

岡　田　幸　助

4．現代版西遊記，シルクロードを行く

観光はこのぐらいにして，道を急ぎ今夜の宿泊地ホショ（和碩）へ向かう．日没は8時35分，道中，日本では想像もつかない石の山々，山の向こう側は砂漠だそうで，砂漠の砂が風に吹かれて山を越え谷を少し埋めていた．このままだと来世紀にはこの道が埋まってしまうかもしれないと陳さんが言っていた．21時30分ホショに到着，ホショホテルで一泊した．

9月1日

ホテル出発8時20分，沿道にヒマワリ，芦，唐辛子の畑が続く．「流砂川を案内しましょう」と陳さんが一同を車から降ろしたが，公安警察官がやって来て，何をしているのか尋問した．ここは国家機密により写真撮影は禁止だという．陳先生が食い下がったがどうしても写真は許可されなかった．西遊記によると，沙悟浄がここより参加し，また帰路三蔵法師がここで死んだという．

道路と平行して鉄道の線路が見えた．現在，鉄道はコルラまでで，コルラからアクス間は建設中である．車は一度走りだしたら4時間ぐらいは停らない．道はそんなに悪くはないが，そこを我々の車は大型トラックや石油のタンクローリーを時速100kmぐらいで追い越しながら走っていく．揺れが激しく頭を何度も窓ガラスにぶつけた．席をお互いに代わりながらドライブしたが，やはり窮屈である．うつらうつらしているとダイアナ妃死亡のニュースが飛び込んだ．趙先生がカーラジオのニュースで聴いたことを教えてくれた．

道路にはゴミが多い．特にミネラルウォーターのペットボトルが目に余る．皆，ゴミを平気で車の窓から捨てている．風がどこかに吹き飛ばしてくれることを期待しているようであるが，いかに広い中国でもいただけない．途中，多数の交通事故を起こした車や，故障した車を目撃した．日本だと携帯電話で連絡するとすぐJAFを呼ぶことが出来るが，ここではどうなるのだろうと不安になる．

11時ちょうどにコルラの街を通過．コルラを少しすぎたところで我がランドクルーザーがパンクした．車を停めてタイヤ交換をしていると，悪いことにタイヤを留める6本のねじのうち2本が折れた．コルラまで引き返し，修理をしてもらう．この間，6時間のロスタイム．深夜の23時にやっとシンフ（新和）に到着．本当は本日中に目的地のアラーに着く予定であったが，やむなくここで一泊することになった．

9月2日

7時30分，ホテルを出発．あと400km，午前中にアラーに着けるだろうか．イアグリで朝食として「うどん」を食べる．少数民族の衣装を着て料理を作っている女の人がとても美しい

岡田幸助：岩手大学支会，岩手大学・農学部・獣医学科・家畜病理学教室教授

(写真8). 吉岡君がポラロイドカメラで撮影し，出てきた写真を1枚あげると，それを見ていた同僚が私達も撮ってくれと言いだした．彼は親切にもそれらに応えてやっていたが，だんだん人が集まってきた．次々に写真を要求されてきりがない．これでは村中の人たちが集まるよと楊さんが止めに入った．結局25枚のフィルムを消費しておしまいにした．

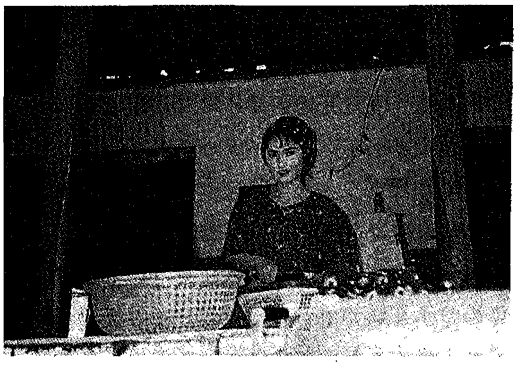


写真8　少数民族のうどん食堂

あたりの景色がいつの間にか砂漠に変わる．陳先生によると，今年は雨が多いので草（勿論乾燥地帯に生える草であるが）が生えてきたという．帰国後，盛岡気象台の台長さんにこのことを話すと，エルニーニョ現象による異常気象と関係があるのだそうだ．地表が奇妙に白く見える．雪でもなし，あれは何かと聞くと地中から析出した塩とナトリウムだそうだ．まるで雪が積もったように見える（写真9).

写真9　地表に析出した塩

11時30分アクスにあるタリム農墾大学の駐在所に着いた．ここで少し休憩．目的地のアラーまであと110km，もう目の前だ．休憩室に毛沢東，鄧　小平，江沢民など中国の指導者の写真が掲げられていた．現代の若者は，彼らの唱える共産主義よりも「科学，技術，金」を信頼しているそうで，中国の人の考えもずいぶん変わってきたものだ．これらはそれぞれ国をつくり，人を育て，生活を支えるという．

5．タリム大学　砂漠に克った大学

13時，我々は遂に大学に到着した．ウルムチから1,200km，2日半かかって到着，感無量である．今までの荒廃した景色とは打って変わって，地の果てとも思われる砂漠の中に緑豊かな学園が目の前に出現したのは信じがたい．この土地は軍が開墾した土地だそうで，立派な校舎が並んでいる（写真10). 道路や建物の床には砂漠から析出した塩類が粉のように蔽い，埃っぽい．学生の授業時間は午前8：30～13：30，午後16：30～20：30で夜遅くまで授業がある．全寮制で寮費は年300元，授業料は600元である．

午後4時半から我々の講演会が始まった．教室に行くと学生が席もないぐらいびっしりで，教室の外にもあふれている．講師の紹介に学生は元気な拍手で応えてくれた．大変気持ちがいい．吉川博康助教授は「ネコエイズウイルス感

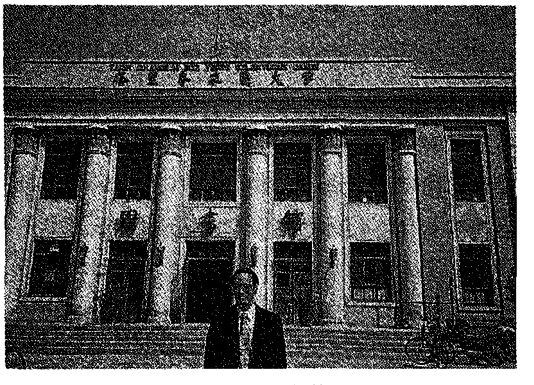


写真10　タリム大学図書館

染ネコの病理」について，私は「牛白血病研究，最近の進展」について講演した．途中停電があったが，学生は大変熱心に質問してくれた．あとで陳先生から聞いたところによると，聴講したのは3クラス（獣医4年生漢民族と，少数民族の2クラス，畜産4年生の1クラス）120人であったという．学生の38％が少数民族で，残りが漢民族である．少数民族の学生は1年生の時に中国語を学ぶ必要があるのでクラスが分かれているのだそうだ（写真11）．

宿舎は鉄筋コンクリート4階建て職員住宅の一部を当てがわれた．あまり使用されていない

写真11．講義を聞く学生達
（前列右から銭教授，王教授，吉川博康助教授）

ためか水道の水から錆が出たのには閉口した．

夜は学生による歓迎会をしてくれた．少数民族出身の学生が自分たちの民族の踊りや，歌，楽器を披露してくれた．誇らしげに美しい民族衣装を着て踊ってくれる姿が印象的であった．学生は禁酒，禁煙で酒を飲んでいるのを発見されたら即退学だそうだ．従って歓迎会も飲み物はジュースだけであった．トイレのために席を立つと教室には学生が多数まだ残っていて，自習をしているのにはびっくりした．

9月3日

朝食としてナンをいただく．ナンをミルクに浸けると柔らかくなり大変おいしい．ナンは保存がきき，砂漠地帯で好都合だという（写真12）．

写真12　ナン（中央）

午前中，吉川教授が「日本の獣医学事情，馬のサルコイドとパピローマウイルス」について，王教授が「マレック病におけるグルチコルチコイドレセプターとアポトーシス」について，銭教授が「麻酔について」講演を行なった．

午後，タリム川を見学する．タリム川は天山山脈の雪解けの水を集め，下流の水は海に注がないで砂漠の中に消えてしまう内陸川で，世界1長い（2,000km）．岸は深いぬかるみで，うっかり足をつっこむとずるずると足が取られた．まるで底なしの沼で，遊んでいる子供が飲み込まれ死んでしまうこともあるそうだ．川にはタリム橋がかかっている．1972年に建設され，建設費800万元だったという．橋桁は目には岸の地面から1mほどしか見えないが，地中に深さ60mも埋めてあるのだそうだ．それだけ地盤が軟らかいということか．

その後，農学部の先生方と懇談会が行なわれ，学長からタリム大学の沿革，機構の説明があった．それによると新疆地区には大学が北に18，南に3校ある．新疆地区には資源が多い．綿花は中国1位で，畜産も大きい．羊，牛が主である．大学はアラーにあり，アラーとは緑の島の意味である．一方，タリムは「手綱のない馬」の意．1958年漢民族が入植し，同時に大学も創設された．王震将軍がこの地区の農業のセンターにしようとした．この地区の緑は40年にわたる

2世代の人々の努力によって出来た．大学の周囲は国有農場である．学生数は2,500人．先生は273人（うち教授と助教授86人），職員500人．大学は5系（農学科，林学科，獣医学科，水利学科，農業工学科），4部（基礎，生物，社会，体育），2講座（コンピュータ，食品）からなる．水利，獣医学科が人気学科だそうだ．獣医の教授と助教授はあわせて8人で，4講座（基礎，畜産，臨床，生産）からなる．大学の面積5,000ムム（15ムム＝1hr，1ムム＝660m²）である．図書館には23万冊の蔵書がある．

付属農場は面積2,000ムムで，農作物（綿花），畜産物（豚，鶏，牛，羊，魚），果物，材木を生産する．大学に油，肉，食品を提供し，年間100万元の予算を大学に繰り入れる．これまで8,000人の卒業生が生まれ，タリム川流域の農場で働き，管理の仕事をしている．周囲の農場長のほとんどが本校の卒業生だという．最後に今後の交流について話しあわれた．いきなり，日本と交流といっても難しいので，取りあえず，今後，お互いの大学の情報交換をはかることが確認された．

懇談会のあと砂漠見学に出かけた．大学から車で15分ぐらいのところにあり，目の前に広大なタクラマカン砂漠が広がっていた．草の1本も生えていない砂漠を想像していたが，笹や紅柳という赤い草が生えていた．冬には地中から水が滲みだしてくるそうで，地表に地中の塩が溶けだしていた．雨が降るとこの塩が溶けだすので砂漠には雨が降らないほうが良いのだそうだ．靴には砂が入りこむのでむしろ裸足の方が気持ちが良いと，陳先生は靴下も脱いでしまった．私もまねをしてみたら，さらさらして砂漠に来た実感がもてた．運転手のモさんは軍役で10日間の砂漠の中で訓練を受けたそうだが，とても怖かったという（写真13）．

夜には送別会が企画された．昨日は少数民族の学生による催しであったが，本日は漢民族の学生が中心であった．カラオケの音楽をバックに社交ダンスを興じた．私は全く踊れないのに

写真13　タクラマカン砂漠
エルニーニョ現象により草が生えている

無理やり引きずり出され，必死で彼女の足を踏まないように下ばかり見て，相手の美しい顔などを見る余裕などなかった．また，日本の歌がカラオケに多数入っていてそれを歌えという．アザミの歌，ソーラン節，北国の春，浜辺の歌などがあったがモニターの画面を見ると中国語の歌詞に引きずられて，日本の歌詞をどうしても思い出せないで詰まってしまうことしばしばであった．そこで意を決して，カラオケにはない，「チャグチャグ馬っこ」の歌を歌って，場を逃れた．今度中国に行くときには歌詞カードを持っていったほうが良い．

6．帰路

9月4日，全ての公式行事を終えて帰路についた．8：30大学発，1時間ほどでアクスにある大学の駐在所着，10：40駐在所を発った．街道にはポプラに似た白楊という並木が植えられ，そこに民族服を着た人が御するロバ車，牛車，馬車がのどかに走っている．荷物は綿花，羊，子供を含む人，山積みの西瓜などで，まことにほほ笑ましい．時にはそれらをトラックターで運んでいることもあった．街道端にガソリンの

給油所や店がいくつもあり，それらの看板には漢字とウイグル文字が並記されていた．ガソリンには90，70，0の3種類あり，それらが何を意味するのか分からない．大型トラックが石炭や石油を積んで多数走っている．それらを追い越しながら我々は先を急いだ．

13：45シンフに到着．そこで昼食を食べる．鳩の丸焼きがでてきて一同ぎょっとした．中国で4本足で食べられないものは机だけ，飛ぶもので食べられないものは飛行機だけという．毎食中華料理なので我々が飽きないようにとの心遣いのようだ．

途中でランドクルーザーが再びパンク，これで旅行中3本のタイヤがパンクしたことになる．清真と書いた食堂があったが，何の意味かと尋ねるとイスラムの人たちの食堂で，お祈りをして殺した動物の肉だけを食べさせるところだそうで，勿論豚肉は出てこない．

22：40ホショに到着．来るときに泊まったホテルで食事をした．しかし，客室は満室で，他のホテルを探さなければならない．深夜，こんな小さな町で我々10人が泊まれるところが見つかるだろうかと不安になる．車のメーターによるとタリム大学からここまでで748km走ったことになっていた．幸い龍駒ホテルで空室が見つかりそこで宿泊した．

9月5日

7：40龍駒ホテル出発．道端の店でナンを朝食として食べる．かまどの内側に張り付けて焼いていた．ナンの中に野菜が入っていて大変おいしい．まるまる1つは食べきれず，半分は日本にお土産として持って帰った．山越えの途中急に車が止められた．何事かと思ったら道路工事のためダイナマイトの爆破であった．目の当たりでの爆破には迫力があった．12：30タパンツで朝食を取った．15：00ウルムチ着，ここまで1,140km．大変な遠い所までよく行ってきたものである．デパートで買い物と紅山公園の観光をした．英吉沙ホテルで夕食をとり，ウルムチのホテルに宿泊した．

9月6日

起きてみるとホテルは停電であった．断水で真っ暗な中，便所を使用するのは大変であった．8：10ホテル発．空港で王，銭先生と別れる．空港で朝食をとり，10：05ウルムチ発の飛行機で北京に向かった．

9月7日

燕沙デパートで買い物をして，北京発15：00の便で成田に無事到着した．

思えば長い旅であったが，普通では行くことの出来ない所に行くことが出来て，貴重な体験をすることが出来た．シルクロードは中国国内で3ルートある．即ち，天山北路，天山南路および西域南路であるが，私達はそのうち天山南路を旅したことになる．異文化に触れることが出来ただけではなく，その間，中国の先生方と一緒に旅をして，中国の人たちの日本に対する期待の大きさを知ることが出来た．これも我々を招待して下さった中国獣医病理学会とタリム大学のおかげで関係各位に心より感謝する．また今回の旅行の企画とお世話をして下さった長春農牧大学の王水琴教授を初め学長秘書の林さん，そのかげにある景学長先生の御好意に感謝する．また遠路はるばる迎えに来て下さり，長時間の運転をして下さった楊事務主任とモさん．旅行のお世話と道案内をして下さった陳副校長と奥さま，日本側のお世話をして下さった吉川教授と助教授に心から感謝する．そして通訳をして下さった趙先生に心から感謝する．今後日本と中国が交流し，お互いの発展が図れることを祈念する．

岩獣会報（Iwate Vet.），Vol. 23（No. 1），4−9（1997）.

資　料

ジャカランダの咲くところ　ザンビアの3ヵ月−(1)

岡　田　幸　助

1996年7月から9月末まで国際協力事業団（JICA）の要請で免疫病理学の短期専門家としてアフリカのザンビア大学に派遣され，大学院生・学生およびカウンターパートの指導にあたってきた．そこで様々貴重な体験をすることが出来たので以下，ザンビアにおいて経験したことを紹介したい．

1．渡航準備と渡航

派遣に際し徹底的な健康診断が要求された．指定された病院で診断を受け，JICAの専門医のOKが出るまで何度でも再検査を受けなければならなかった．また，狂犬病，黄熱，B型肝炎，破傷風などのワクチンを受けなければならなかった．それぞれのワクチンに接種間隔が指定されているので渡航まで2ヵ月しか余裕がなくワクチンプログラムを立てるのが大変であった．ザンビアではエイズウイルスの危険が高いため，歯科，散髪，輸血を必要とするような手術は避けたほうが良いという．そこで虫歯を治し，出発直前に散髪をして3ヵ月間散髪をせずに我慢した．ところが到着後すぐ歯が欠けてしまい帰国まで歯に物が挟まってしようがなかった．メガネを壊すとザンビアでは自分に合ったメガネの調整が困難なので全く同じメガネをもう一つ用意した．最も危険の高いのがマラリアである，蚊に刺されないのは不可能であるからだ．そこで蚊取り線香180巻（90日分），忌避剤，防虫スプレーなどありとあらゆるものを持っていった．また途中ロンドンの指定された薬局でメフロキンを購入し，毎週1錠，帰国後も1ヵ月間飲み続けた．この薬は頭痛など副作用の出ることもあるそうであるが幸い私は副作用が出なかった．

食料品はみそ，醤油，乾物，レトルト食品を可能なかぎり持参した．米は現地の調整員の人が手配してくれていた．そんなわけで手荷物は90kgに達した．ザンビアの首都ルサカまで直行便はなく，成田からロンドンまで12時間，ロンドンからルサカまで12時間かかった．ロンドンまでは手荷物を30kg＋40kg，計70kgまで認めてくれたが，ロンドンからルサカ間は＋30kgしか認められず，ロンドンでリュックサックを買って，10kg分移した．結局，最後には30kg引きずって辿り着いたことになる．飛行機は生まれて初めてのビジネスクラス，こんなにサービスがいいものとは知らなかった．

2．到着

ザンビアは南緯15度，1,400mの高地にあるので比較的涼しくアフリカの軽井沢と言われている．到着後早速，インターネットのe-mailで教室に手紙を書いた．

「病理学教室の皆さんお元気ですか．

お陰様で予定どおり無事ルサカに到着しました．体調も問題ありません．

岡田幸助：岩手大学支会，岩手大学家畜病理学教室

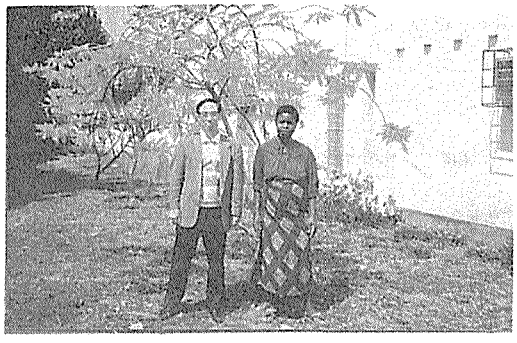


写真1　メイドのマギーとフラットの前で

ザンビアは日本の国土の2倍の所に，1,000万人程の人しか住んでいません．ルサカの人口は約100万人だそうです．空は真っ青で，夕焼けや日の出はとても美しいです．これから乾期に入り雨はほとんど降らないそうです．草は徐々に枯れ始めていますが，ハイビスカスやブーゲンベリア，そして名前のわからない美しい花がいっぱい咲いています．ザンビアの人は皆真っ黒で，夜など洋服だけが歩いているように見えます．昨晩（5日）は新しく到着した我々3人（藤田，菱沼，岡田）の歓迎会でした．ワニの肉のペーストをパンに付けて食べましたがあっさりしていて違和感はありませんでした．ステーキはダチョウの肉で多少硬かったですが，結構こくのあるおいしい肉でした．気温はかなり低く，レストランでは足元に電気ストーブがつけてあったのには驚きました．黒人は暑いのには平気ですが，寒さには弱いようです．こんなに寒いのに蚊がいるのは不思議です．マラリアにかからないよう早速蚊取り線香をたいたり，液体アースマットを取り付けました．（コンセントにさしておくと60日もつという宣伝であったが30日しか持たなかった，説明書を良く読むと夜間だけ使用の場合であった．）

ホテルの宿泊は1泊だけにして，翌日から早速フラットという3LDKの1戸建ての住宅に移りました．6戸が一つの塀の中にあり，各戸に十分な広さの庭があります．私の家の庭には実の沢山なったパパイアの樹があります．門番が2人，庭師が1人，メイドが1人居ります（写真1）．皆とてもまじめに働いてくれます．窓には鉄格子が部屋の内側に取り付けてあります．ガラスが割られたら，逃げる時間をつくるためです．寝室には緊急用のボタンがあり，それをおすと5分以内に20人のガードマンが駆け付けてくるそうです．また各自に無線機を持たされ，いつでもJICA関係者と連絡が取れるようになっています．全ての扉にカギがあり，その数がすざましくカギの管理が大変です．

通貨はワッチャといい，小額紙幣しかないのでちょっと両替すると大変な量の札束を持たされ，財布にはとても収まりません．クリップで留めた札束で買い物をします．お札には金額によって象やキリン，国鳥の鷲などが描かれ，記念にもって帰りたいと思います．

私のフラット（自宅）に電話が付きました．時差は日本から7時間引いてください．日本の午後4時はザンビアの同日午前9時です．（7月4日記）」

ザンビアは現在非常なインフレにある．1984年に1ドルが250円の時，1クワッチャが114円であったものが，89年には1ドル140円で，1クワッチャ9円，今年は1ドル107円で，1クワッチャ10銭にまでなってしまった．

3．ザンビア大学

ザンビアにはウシが320万頭いるが，かつてこの国に獣医師の教育をする大学が無かったので，酪農振興のため獣医学部の設置が望まれていた．そこで1985年10月日本政府が40億円の無償供与を行い，ザンビア大学に獣医学部を創設した．また92年10月には大学院修士課程が設置された．

「病理教室の皆さんお変わりありませんか．

現在は早春，乾期にあたります．寒いので毛布を3枚重ねて寝ています．小生も元気に過ご

しています．夜の間に泥棒を威嚇する銃声が聞こえたなどと皆が言っていますが，私はそんなことも知らないでのんきに寝ておりました．

さて病理はパラクリニカルという大講座に所属しています．教室には松川先生（元酪農学園大学教授），昨年北大で学位を取ったバイヤット，7年前岩大に研修に来たマクセルがいます．バイヤットはこちらでは講師で，何かと私の面倒を見てくれます．マクセルはやめてしまったといううわさもあり，心配していましたが元気に働いていて安心しました．以前岩大で魚病学を教えてくださった長林先生もお元気です．

12日金曜日に解剖がありました．肺炎と腸炎の仔牛と管理不良で死亡した仔豚3頭でした．テクニシャンが手伝ってくれて割と早く終わりました．これからどんな病気と出会えるか楽しみです．

大学の建物は赤いれんが作り風で，真っ青な空と良くマッチしています．掃除も行き届いて清潔な感じです．キャンパスは広く，ブーゲンベリアの植え込みや，アフリカ独特の樹木が植えられて良く整備されています．余裕ができたら大学内を探索してみたいと思っています．

大学にはJICAから私たち3人に与えられた，三菱のワゴン車ランサーGLX（新車）に乗って通っています．菱沼先生も私もペーパードライバーなので専ら運転は藤田先生です．こちらの人たちは運転マナーが悪く，すごいスピードを出し，車や道路も整備不良で，事故が頻発しています．でもいつまでも藤田先生に甘えてはいられないので2人で練習に励んでいます．面倒なことに，車には盗難防止のため，警報装置が設置してあり，操作を誤ると車は私を泥棒と認識し，けたたましい電子音を発します．さらに駐車して車を離れる時にはハンドルに重たい長さ60cmぐらいの鉄棒のようなカギをはめなければなりません（写真2）．それを外すのにもこつが必要で，なんとも面倒です．買い物にはこの車で行きますが，みだりに街をぶらつくと，強盗に襲われますので，さっさと用を済ませて帰らなければなりません．

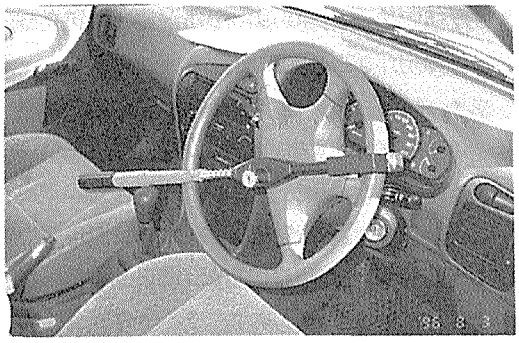


写真2　ハンドルロック

先日岩大卒業の門平先生（疫学の長期専門家）に郊外の農家の調査に連れていってもらいました．そこは街とは異なり平和そのものです．泥と萱で作った丸いマッシュルームハウスが5～6戸で1軒の家をなしています．すなわち一つ一つのハウスは我々の部屋に相当するのです．奥さんも2・3人いて，それぞれ別の部屋（ハウス）に住んでいるのでプライバシーも保たれるというものです．とても優しい純朴な人たちで手をたたく独特なしぐさで私たちを歓迎してくれました．ウシを数頭とニワトリやアヒル（首に毛のない独特な品種）を飼っています．服装は民族服を着ているわけではなく，我々と同じ洋服です．日本の弥生時代の様な生活と現代が入り交じり不思議な思いがします．せっかくのんびりと平和な生活をしているのに，我々が侵入して無理に近代化する必要もないように感じました．子供たちのきらきらした目がとても印象的です．（7月13日記）

こちらにはマクセル君のような黒人と，少数のインド系の人がいます．こちらの学校にいる黒人のスタッフのほとんどの人は日本に留学や研修を経験しているので，日本式にお辞儀をしたり，日本語で挨拶をしてきます．アメリカで

会った黒人の人とずいぶん印象が違い温和な感じがします．(7月30日記)」

ルサカにおける一般の市民は，コンパウンドと呼ばれる居住区に住んでいる．ブロックを積み上げた簡単な家で，数家族が一緒に住んでいることが多い．電気を引いている家と引いていない家がある．金曜日の夜はお酒を飲んで一晩を踊り明かすのが楽しみのようである．

4．通信事情とインターネット

以前は日本に手紙を出すと2週間ほどかかった．現在でも航空便で10日程かかる．電話も設置台数が少なく，なかなか繋がらなかったという．多田チームリーダーによるとインターネットができるまでは日本との連絡はもっぱらFAXで行っていたのでその代金がばかにならなかったそうだ．今回の滞在は以前の短期専門家からお聞きしていたよりはるかに快適な生活を楽しむことが出来た．その一つはインターネットシステムの確立であろう．日本からの連絡事項を大学まで即時に受信でき，夜間フラットから返事が出来るのは何にもまして有り難かった．

「フラットには3台の電話が設置され，e-mailも使えます．Netscapeをつかって朝日や読売のニュースも見ることができて，先人のかたがたに申し訳ないみたいです．パソコンは短期専門家の3人ともMacのPower Bookを持参しました．アドレスはJICAが短期専門家のために取ってくれていて，我々が到着する1週間前から繋がっていました．共通のアドレスですが，各人に書簡箱があり，秘書が分別することになっています．実際は我々の方が早く大学に着くので自分たちで分別していますが．受信は大学で一括して行い，送信は各人自分のフラットまたは大学から行っています．自分でもアドレスを取得できますが，短期ですし，現在さほど不自由を感じていないのでこのままアドレスを取らないでいこうと思います．私の場合，岩手大学の私のアドレスに来たものは，ザンビアに転送するようにしてあるので，委員会の様子や，岩大の停電や断水のお知らせまでわかります．パソコンを持参するのに荷物になる，盗難の危険があるなど躊躇しましたが，持ってきてよかったと思っています．こちらの大学でも光ケーブルの工事が始まっています．内線電話もほとんど機能していないのにどうなるのだろうと疑問を感じますが，こと情報に関しては世界共通になったと思います．さてそこで私達は何をするか，ザンビアの人たちは何が幸せかが問われます．(7月15日記)

お変わりありませんか．わたしはこちらの様子にようやく慣れてきたというところです．10月に大統領選挙が予定されていて，爆弾騒ぎ(1人死亡)などもあり，治安がさらに悪くなる恐れがあるので，本日治安対策のための無線機のテストをやりました．日本人は全員無線機を持たされています．日本のようにどこにでも電話がありませんから，時々これを使って交信ができるので大変便利です．最初は全員に聞こえるチャンネルで話し，相手が出たら特定のチャンネルに切り替えて話すのです．しかし，時々切り替えるのを忘れてルサカにいる80人ぐらいの日本人全員に聞かれてしまうこともあります．(7月30日記)」

5．中学・高校生の発明工夫コンテスト

7月にJETS (The National Fair of Junior Engineers, Technicans and Scientists) という中学生と高校生の発表会を見ることが出来た．彼らは全国から選ばれた生徒達で，数学，理科，技術家庭に関する発明や工夫の優秀作品約100点を工学部の教室を使って発表していた(写真3)．最優秀作品については大統領から表彰されていた．数学における計算方法の発表，太陽熱を利用した料理器や薬草からマラリアに利く薬の抽出法など生活に密着した発明や工夫が多

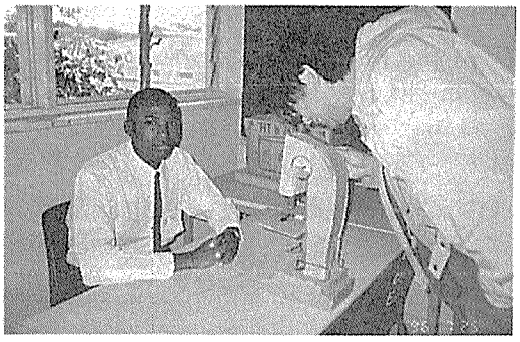


写真3　高校生による手作りの顕微鏡，けっこう良く見える

く，その意欲に大変感動した．ザンビア人は温厚な反面，依頼心が強いと言われている．私はザンビア人に向上心が無いのではないかと思っていたが，この見学はそれらの偏見をぬぐい去るものであった．この意欲を持ち続けることこそ，この国の発展と幸せにつながるのではないかと思った．

6．リビングストーン

7月27日，世界3大滝のひとつ，ビクトリアの滝に行った．乾期で水が少なくて残念であったが，そのスケールには圧倒された．地名リビングストーンというのは有名なキリスト教の宣教師の名前で彼がこの地に宣教を始めたことから付けられている．滝の下流には橋がかけられており，そこにバンジージャンプの飛び込み台が設置されていたが，そこからのぞき込むだけで足がすくんだ．飛び込む料金が100ドルもかかり，何かあったら笑い者になるだけであるのでやめておいた．近くに直径6mもある大きなバオバオの樹があり，そのユーモラスな形に驚嘆した（写真4）．この樹には細長いラグビーボール大の実がなり，それを割ると種の周りに綿菓子のような果肉がついており，甘酸っぱい（写真5）．

7．農業博覧会

8月3日，ルサカ市内の広大な展示場で農業博覧会があり見に行った．地元の産業を色々紹介しており農業のみならず工業，漁業，サービス業の展示もありザンビアの産業の様子が良く

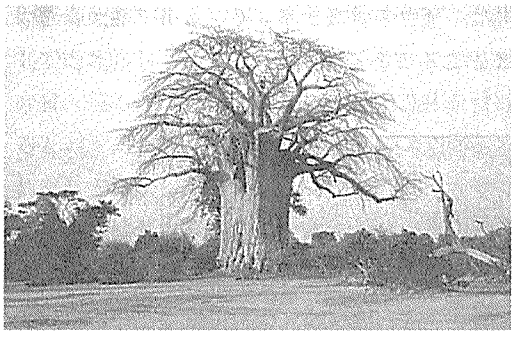


写真4　バオバオの木（但しこれはロアーザンベジで撮影）

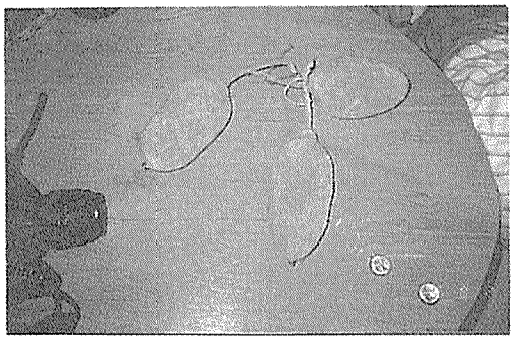


写真5　バオバオの実，種の囲りの綿菓子のような果肉を食べる

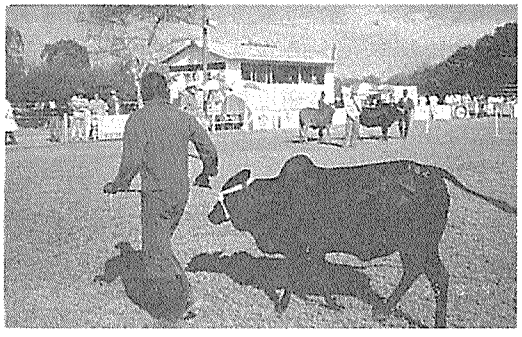


写真6　背にコブのあるアンゴニ

写真7　豆炭，七輪プロジェクトのブース

わかった．ウシの共進会もあり，背中に大きなコブのあるアンゴニ（写真6）などアフリカ在来種を沢山見ることができた．こちらの人にとっては一種のお祭りで，ボクシングや航空ショーなどもあり大変にぎわっていた．ザンビアは意外と寒く，煮炊きや暖を取るために炭を大量に消費する．当然，野山の樹が無秩序に消費されるので，日本からの援助で豆炭と七輪を普及させようとプロジェクトが組まれている．その紹介のブース（写真7）などもあり興味深かった．ちなみに関係者によると七輪と豆炭は結構評判が良いそうである．

8．ロアーザンベジ

8月5～7日まで日本人の専門家とその家族十数人でロアーザンベジ国立公園にサファリをしに行った．白人が経営する川べりにあるロッジで，川ではカバが沢山気持ち良さそうに水浴したり昼寝をしたりしていて，平和そのものであった．2人ずつ常設のテントに宿泊した．朝起きてみると，あたりにライオンの足跡がありぞっとした．ジープを改造したサファリカーに乗って，双眼鏡を片手にさまざまな動物を観察した．残念ながらライオンは姿を見せなかったが，象や豹などいろんな動物を自然のまま見ることができた（写真8）．長期専門家の男性達はサファリには飽きてきているようで，釣を楽しんだ．30cmぐらいのブリムが数匹釣れたようである．一番の獲物とて，何とカバが引っ掛かってしまった．最初は正体がわからなかったので大きな魚が釣れたと思って追い掛け回したところ，急にカバが姿を現し，皆，仰天してしまった．あわててナイフで糸を切り離し，事無きを得た．下手をするとワニのいる川で船が転覆するところであった．　（つづく）

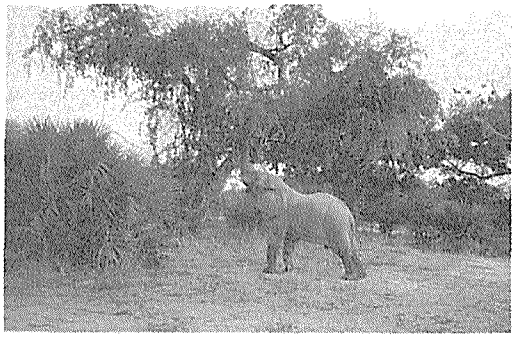
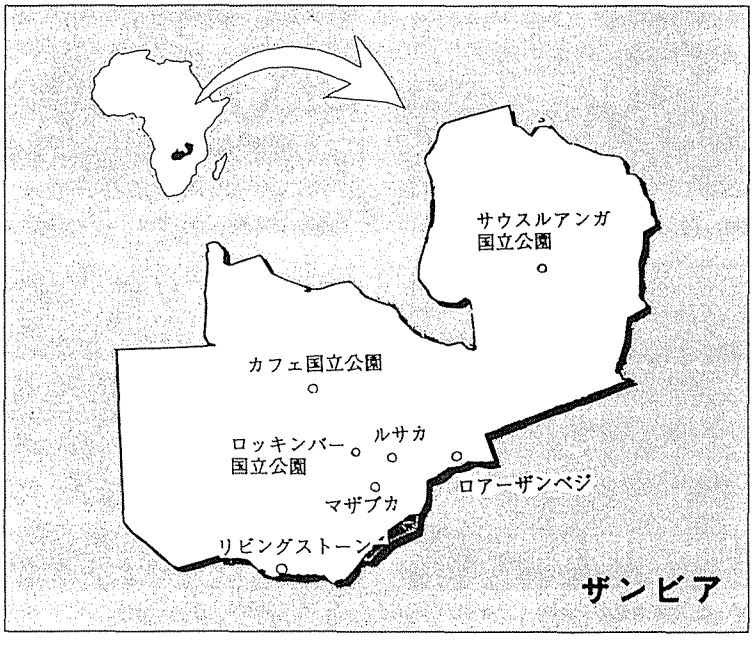


写真8　餌をあさるゾウ



岩獣会報 (Iwate Vet.), Vol. 23 (No. 2), 52－58 (1997).

資　料

ジャカランダの咲くところ　ザンビアの3ヵ月－(2)

岡　田　幸　助

9．教会

8月11日，初めて念願の黒人教会の礼拝に出席することができた．教会は街の中央にあるUnited Church of Zambiaという所に行った．ルサカ市内にプロテスタントの教会はいくつもあるが，ここは英語で礼拝する唯一の所のようである．その他の教会は現地語で礼拝をしていて，マクセルも現地語の教会に行っているようである．礼拝は10時から始まるがその少し前に着いた．車と人が道にあふれ，相当な人が来ているなと感じた．早速，同じ大学のテクニシャンであるムレが私を見つけて挨拶をしてくれた．今日，彼の9ヵ月になる長男が幼児洗礼を受けるという．大多数の人が正装でとびきりのおしゃれをして集まっていた．その表情も街や大学で見るのとは異なり，喜びにあふれていた．ルサカではいつも財布をしっかり押さえて，身構えていなければならないのであるが，ここではその緊張が不要のように思えた．

出席者は600人ほどでほとんど黒人である．前の方に子供が50人ほど座っていた．白人系がぱらぱら，日本人は私一人であった．

オルガンの伴奏はなく手拍子を混ぜた陽気な讃美歌で礼拝が始まった．礼拝の前半に洗礼式があり，十数人の幼児と数人の子供が洗礼を受けた．その後，幼児の両親とその家族が一組ずつ前に出て，頭に水をたっぷりと注いでもらった．中にはわっと泣き出す赤ちゃんもいた．洗礼が終わると，役員の人から洗礼証明書のカードをもらい，皆にこにこして席に戻ってきた．

聖書朗読は小学生の男の子と女の子が行い，その後15分ぐらいの説教があり，「天地こぞりて」の頌栄で礼拝は終わった．退席は前列から整然と中央の通路を通って，聖歌隊の讃美歌を聴きながら後ろの出口に向かった．従って600人の出席者があっても全員が牧師と挨拶をして帰れるというわけである．

10．現地の言葉と食事

現地では英語が公用語である．部族が沢山あり，それぞれに異なる言語がある．ザンビア人は誰でも数種類の言葉が話せる．主なものはベンバ語，ニアンジャ語，トンガ語などで私が，覚えたものを以下に2・3紹介する．

ベンバ語

チスマサーナ：具合がいい

シャレニッポ：さようなら

ナットテラサーナ：ありがとう

チャブイノ：どういたしまして

マーブカシャーニ：おはよう

トリビーノ：了解

ニアンジャ語

クッタクッタ：お腹がいっぱいだ

岡田幸助：岩手大学支会，岩手大学家畜病理学教室

トンガ語

ウゴンベ：ウシ

マルビアブティ：こんにちは

トワリビアブティ：こんにちは（上の応え）

ガボット：元気です

これらの言葉を店で物を買ったときなど，ちょっと話すとずいぶん喜んでくれて話が弾む．

現地の人の主食はシマといって，トウモロコシの粉（ミルミル）をお湯で練ったもので，手でつまんで食べる．副食はレイプという野菜を刻んで煮たものや，小魚を食べている．バッタや芋虫，ネズミなども食べるようで，前2者は私も試してみた．特別おいしいというわけでもないが，まずくもない．

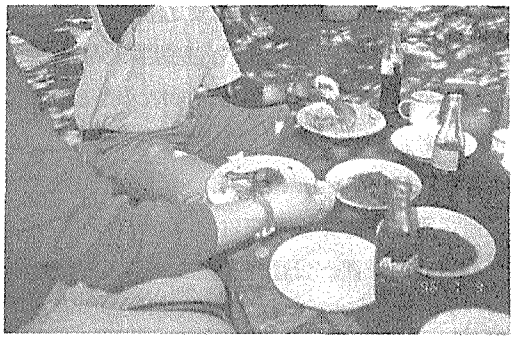


写真9　現地の主食シマ（中央手前の皿）

ところで私の食事はどうしたかというと，スーパーでほとんどの食材は手に入ったので，自炊をしていた．これまで自炊生活をしたことが無かったので，料理の本を持参して肉ジャガや八宝菜など大分レパートリーが増えた．御婦人方から奥さんがいらないねといわれたが，女房はサーバントでありませんと返事した．水はそのままでは飲めない．一度煮沸して，それをコーヒーフィルターで濾過してから飲んだ．毎朝麦茶を作り，水筒に入れて1日中，持ち歩いた．ザンビアではどこでも自動販売機がおいてあるわけではないからである．これが3ヵ月間病気一つしなかった秘訣であったかもしれない．

11．エイズと治安

ルサカ市内のエイズウイルスの感染率は28%で，不思議なことに高学歴者ほど高い．エイズ蔓延の要因は開放的な性交渉と，私生児が差別されないという風土にあるのではないか．ザンビアでは子供を産めるということが女性の価値を決めるので未婚の母が珍しくない．女性の初産は16～18歳で，乳児死亡率が非常に高い．従って，ザンビアの平均寿命は50歳である．

ザンビア人は付き合ってみると非常に温厚で，人なつっこい．それなのになぜ治安が悪いのだろうか．これはひとえに貧困のためであろう．昔から，お金のある人がお金のない人の面倒を見るのは当たり前で，お金持ちから物を失敬するのは悪いことと思っていないようである．私は幸い，3ヵ月の滞在期間中なんら被害に遭わなかったが，長期専門家の方は何かしらの被害の経験がある．我々の住んでいたフラットにもこれまで何度か賊が侵入した記録がある．

ザンビアは1991年の選挙によって，30年続いた一党独裁の社会主義政権は崩壊し，複数政党主義民主運動党（MMD）が政権の座につき，市場経済制の導入，政府補助の廃止，各種規制の撤廃を積極的に進めている．政権の交代は極めて平和裏に行われ，大きな混乱はなかった．しかし，前政権時代からの多額の負債返済，不効率な政府組織体制，干ばつによるメイズ（トウモロコシ）を中心とする農業生産の減少，銅の国際価格の低迷といった諸問題により国民の不満は増大している．最近，警察機能の低下，モラルの低下が著しく治安は依然として悪い．隣国（モザンビーク，アンゴラ，南アフリカ）の内戦の終結により，不要になった武器が流入しているという．

8月15日警察がミニバスのコールボーイ（呼び込みの少年）の規制を行ったのでそれに反発したコールボーイが投石を始めた．一方，バス

会社はコールボーイを排除しないとバスを動かさないと言っている．一応，この騒動はあまり大事にならず治まったが，なぜ国が貧しく発展しないのだろうか．それはザンビア人は依存心が強く，一般に怠惰であるからかもしれない．

12．サウスルアンガにおけるカバの解剖

8月18日から23日までSouth Luangwa国立公園にカバの採材に行ってきた．参加者は門平，藤田，菱沼，森田，岡田，Zuru（講師），Dick（運転手）の7人である．場所はルサカから車で10時間ほど東に行ったところにある象やカバ，ライオン，豹，キリン，猿などが多数生息する有名な国立公園である．私達の滞在したロッジには夜になると象やカバが窓のそばまでやって来て餌を食べていた．その地区の開発計画の一環で，増え過ぎたカバを年間500頭狩猟することが認められていて，革や食肉に利用するのが目的である．私達はその材料を無駄にしないように研究に利用させていただくというわけである．

ザンビアの国土の8％が国立公園，その周囲の20％がgame manegiment areaで狩猟が許可されている．今回カバのcullingを行った場所は後者で，公園の入り口より30kmほど川を下ったところである．

藤田先生は肝臓に自然破壊をもたらす毒性物質の蓄積が無いか，門平先生と森田先生は血清にQ熱の抗体が無いか，菱沼先生はカバの生殖機構がどのようになっているか，そして私はカバにどのような病気があるかを見るのが目的である（写真10）．

私達の滞在期間には27頭のカバが射殺され，その内私は6頭から材料を採取した．早朝の6時にジンバブエから来た白人のハンターが水面に目だけを出しているカバのその目の間を狙って撃つ．静かにしなければならないので，撃つところは残念ながら見ることが出来なかった．話しによると撃たれたカバは水面下に沈み，しばらくすると浮かんでくる．他にも沢山のカバがそばにいるのだが，何事があったか気が付かないそうだ．浮かんだカバをボートで引っ張り，さらにジープの綱で水際まで引き寄せる．カバは重たいので，身体の半分が水に沈んだ状態で解体をする．まず皮をはぎ，水に広げるが，厚さ5㎝，6畳ぐらいの広さになる．次に脚を外し，胸腔を背中側から斧で開く．ノコ切りを使用したほうが楽に思うが，そんな道具はない．最初に肺と心臓など胸腔臓器を取りだす．そこで私がそれぞれの臓器の一部をいただくというわけである．次に腹腔が開けられ，巨大な第一胃が現れる．カバの胃は教科書によって3つとも4つとも書かれていて混乱している．私の確認したところによると，第一胃が左右に大きく2つに別れていてはっきりした隔壁が下がっている．粘膜の構造はどちらもウシの第一胃とほとんど同じである．食道が左右どちら側とつな

写真10　カバの解剖，5個の頭部

写真11　カバ第一胃粘膜，乳頭が密生する

がっているのかは確認できなかった．中央に直径60cmぐらいの第三胃があり，その粘膜もウシの第一胃粘膜とほぼ同様で，蜂巣胃や葉状胃の構造をしている胃はなかった（写真11）．従って第一胃を2つと数えるか，1つと数えるかによって，カバの胃が3つの説と4つの説が生まれたのだと思う．腺胃たる第四胃はウシのそれと同様であった．肝臓や腎臓，腸管をとりだしてほぼ筋肉だけになる．それを筋骨隆々とした黒人の解体人が斧と剥皮刀で切り分ける．肉はトラックで運ばれ，彼らが滞在しているキャンプ地で干して燻製にされ，保存，販売されるようだ．

病変としては胃潰瘍が見られた程度でその他としては寄生虫の寄生が見られた．寄生虫は専門家に回し現在同定中である．カバにはまだ知られていない新種が沢山あるそうだ．私の材料も組織検索をするとさらに面白い病変があるかもしれない．昨年も同様の採材をしているので合わせて検索の予定である．

13．研究活動

3ヵ月の滞在期間中病理学研究室に20例の解剖と22件の一部組織の検定依頼が有った．日本ではあまり見られない病気や，日本でも病気は存在するものの典型的な病変が見られない症例がザンビアには多く大変勉強になった．前者としては狂犬病，イヌの銅中毒症，食道虫症が，後者としては羊の真菌性胃炎，ガンボロ病，ニューカッスル病などを経験した．またカバのcullingに参加し，6頭のカバを解剖し，胃潰瘍と寄生虫症を観察した．期間内に研究を完結させることが出来なかったが，以後長期専門家の松川先生やカウンターパートのバイアットに引き継ぎ，今後連絡をとりながらまとめていきたい．

研究・教育機器は時として日本の大学より上等なものが納められている．しかし残念ながら機能していない場合が多い．それはそれらの機器が外国から棚ぼた式に与えられたものであるから，その有り難さを充分認識できず，取扱いが乱暴で粗末になる．故障してもすぐに修理出来なかったり，しない．一方機器にはそれらを動かすための消耗品や試薬が必要な場合が多いが，その補給が間に合わなかったり，予備に購入しておいたものの使用期限が切れてしまう，などの理由によるのだろう．やはり自分自身で努力して勝ちえたものしか身に付かない．援助の仕方に工夫が必要である．

14．学部学生の教育

「病理学教室の皆さんお元気ですか．帯広の獣医学会御苦労様でした．帰国日がカウントダウンされるようになり，正直言ってもう少しザンビアにいたいと思う気持ちも半分あります．先日，酪農学園の森田先生が骨折で帰国され，北大の藤田先生も急用が出来て帰国されたので，残りは私と北大の菱沼先生，日大の鯉江先生の3人になりました．短期専門家の平均年齢が少し若返り，皆，元気いっぱいです．

こちらはあいかわらず晴れの日ばかりですが，気温はだんだん上昇しております．現在，25度前後でしょうか．ジャカランダという高さ10mもありそうな大きな木が街のあちこちにあるのですが，それが一斉に藤色の美しい花を咲かし出しました（写真12）．日本の桜のように葉はまだ出ていなくて，花だけを木の一面に付けるのでとても見事です．一つ一つの花は大きさ3

写真12　ジャカランダの木，うす紫の花が満開

cmぐらいのラッパのような形をしていて椿のようにぱらぱらと落ちてきます．雨が一滴も降っていないのに，春は確実にやって来て，落葉した木に新芽が出て来るのは不思議です．

太陽が東から出て西に落ちるのは日本と同じですが，ここは南半球ですから，太陽が日中北側にあることに最近，気付きました．ルサカは空気が汚れているので，余り星が見えませんが，先日行ったサウスルアンガなどでは素晴らしい星空が見え，天の川が粉のような細かい星から出来ているのが良くわかりました．もちろん南十字星も良く見えますし，またこんな時期にオリオン座が真上にきています．

7月26日と28日，4年生の学生に病理各論の造血器のところの講義と実習（写真13）を2日

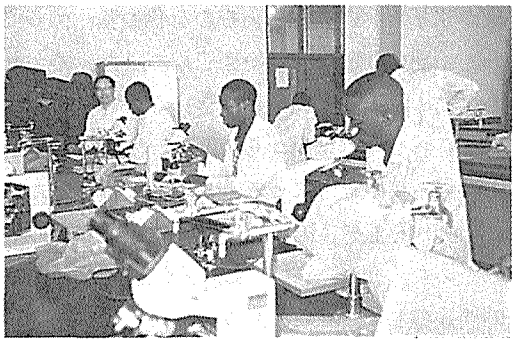


写真13　組織実習風景，日本から援助のオリンパス顕微鏡

間に渡って行いました．御存知のように岩手大学では大島先生がこの個所の講義をなさいますから，私としては初めてのところであり，それを英語でしなければならず準備が大変でした．学生は25名，内女子が3名です．ちなみに黒人は大変目が良く，眼鏡をかけた学生は3名だけでした．また早くませる様で，日本人の学生よりもなぜか大人びて見えます．最初はおっかなびっくりでしたが，だんだん慣れてくると，気質は皆さんと同じだということがわかり，授業をいつものようにやりました．大変熱心に聞いてくれ，講義にも熱が入りました．ここの学生は超エリートの様で，大変頭が良く，ポイントをついた質問を沢山してくれました．私が質問を聞き取れなかったとき，バイアットが通訳をしてくれて大変助かりました．こちらの学生は暗記するよりも，良く考える訓練が出来ているように思いました．教科書は買うお金がないので，誰も持っておらず，先生の言うことを1字1句聞き漏らさないようにしっかりとノートを取っています．これから試験問題を作らなければならないのですが，その問題を他大学の先生が問題として適当かどうか審査して，それから試験に使用されるのだそうです．従ってうっかりした問題も作られず，これも頭の痛い所です．採点が不満の場合，裁判に訴えるという学生もいるそうです．（8月9日記）」

15．大学院学生教育

9月10日（火）にマスターコースの講義を依頼され，Handout（プリント）やスライドのリストも作成し，張り切って準備をした．午前中には私のライフワークの1つマレック病について，午後にはもう1つのウシ白血病について講義する予定であった．当日教室に行ってみると学生が来ない．どこを探してもいない．後で分かったことであるが，この日はもともと授業のない日で全員，寄生虫の採取に学外に出ていったようである．誰が大学院の講義の世話をするのであろうか．たまたまその当日開かれた専門家会議で尋ねてみたが，直接学生を捕まえて連絡するしかないのだという．学生がどこにいるか，短期専門家である私には分かりようもない．日本のように学生は教室に所属していない．連絡用の掲示板もない．会議の席上，多田チームリーダーはJICAの予算で掲示板の設置を提案した．しかしそれは大学（大学院）がするべきことではないかと思った．結局，木曜日に講義をすることになっていたDr. Musondaにその時間をもらって，12日（木）に行った．

来年の7月で現在のプロジェクトは終了する．

私は大学院の充実こそ今後に課せられた課題ではないだろうかと思う．大学院が充実すれば当然研究活動も活発になるであろうし，後継者の問題も解決するであろう．私は短期専門家であるため今までのいきさつや，詳しい事情は知らないが，学生を教室へ配属してはいかがであろうか．専用の講義室もない．本学における大学院の位置づけが整備されていないところに問題があると思う．

後日，一人の大学院生が研究室を訪ねてきて，講義した所の別刷りを，図書館では入手困難なので，もらいたいと言ってきた．あいにく，今回持参しなかったので，帰国後送付すること約束した．大学院生にはあまりよい印象を持たなかったので，大変うれしいことであった．

16．ロッキンバー国立公園

9月8日にロッキンバー国立公園に短期専門家の3人（岡田，菱沼，鯉江）と北大の獣医学部1年生の2人（寺岡，小川）で運転手つきレンタカーに乗って行った．

ここはカフェ川流域湿地帯で湖のように広く，向こう岸は見えない．鳥の多いことが有名でホワイトペリカン，マラブーストーク，ワットルドクレーンなどを見ることが出来た．

普通は誰も行かない漁村のあるほうに行ってみると，そこは果てしなく広がる湿地帯で，木も岩も何もない．何の目的か枯れた草に火を着けて草を焼いていた．焼けたところは真っ黒になり，煙りでくすぶっていた．そこから虫が飛び出すと見えて，焼けた領域の辺縁に大型の鳥が待機していた．漁師の家が数十軒あり，それらは家というよりもかやぶきの小屋で，屋根に魚の開きが干してあった．視界をさえぎるものは何もなくね360度どちらを向いても地平線で，まっ平の皿の中心にいるようであった．地平線には竜巻がいくつか見えた．地平線に木や森の影が浮かんでいて，それを双眼鏡で良く見ると，それが蜃気楼であることに気がついたときには感激した．ブルーワイドビースト，グレータークゥドゥー，カフェレーチェ，オリビなど地平線に無数（数千）の動物が見えた．

17．カフェ国立公園

9月13日（金）カフェ国立公園の北の端にあるLungaロッジへ短期専門家の3人で小型飛行機をチャーターして行った．この国立公園は四国の面積程もあり，とてつもなく広い．到着後，午後からBusanga Swampへサファリカーで行き，そこに常設してある小屋で1泊した．翌朝，ライオンの多数生息する平原へでかけた．そこには5～6頭のライオンがいて，そのうち1頭が今捕まえたばかりのレーチェ（鹿のような動物）を頬張っていた．遠巻きにハイエナや禿げ鷹がライオンの食事の済むのを我慢強く待っていた．別の2頭が交尾を楽しんでいた．雄が雌の上にのり雌の項に噛みつき，ことを済ませると，さっさと雄は雌から下りた．すると雌はさも気持ちよさそうにごろりと一回転寝返った．その動作を飽きもせず，10分毎に何度も繰り返していた．（ということは私達も飽きもせず長時間観察していたことになるが）．

18．マザブカ訪問と青年海外協力隊員の活動視察

帰国間際の9月21日に私と菱沼先生の2人でマザブカを訪問した．マザブカはルサカの西100kmのところで，ここには私のカウンターパートであるバイアットの実家があり，彼が案内してくれた．マザブカではサトウキビや綿の栽培が行なわれ，木も多く緑豊である．彼の一族はインドから第2次世界対戦後この地に移り住み，商売で成功し，大きな家に住んでいた．彼らは熱心なイスラム教信者でその生活を見ることが出来た．（写真14，15）

正午すぎにバイアット宅に到着し，ただちにマザブカで活動している女性で酪農学園大学卒

業の上手麻路隊員を訪問した．街から少しはなれた寂しい1軒屋に彼女は一人で住んでいた．彼女は牛のタイレリア症の発生している農家へちょうど往診へいくところなので，付いていくことにした．以前この地にプロジェクトが行われていた頃は牛に薬浴をさせていたが，プロジェクトが終了した現在は資金がなく薬浴させることができないのだという．また治療に回るにも車がなく大変苦労している様子が良く分かった．彼女は泥棒に遭ったり，大きな病気になったりしているが，それらに負けることなく非常に明るく頑張っていた．大学に高額な資材を投入するよりも，このような現場で頑張っている隊員に車を1台貸与するほうがよほどの本当の効果が現れるのではないかと思った．

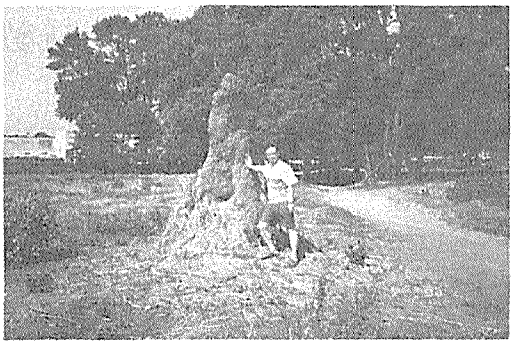


写真14　巨大なアリ塚（マザブカ）

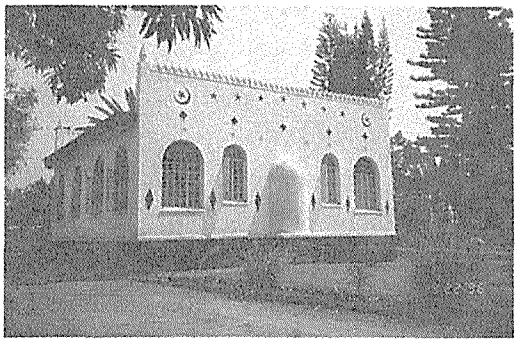


写真15　マザブカにあるイスラム教のモスク

19．セミナー

9月18日（水）4時から1時間の公開のセミナーを行った．大学のスタッフや学生と接触する最後の機会となるので充分な準備をして臨んだ．聴衆は40人程度であったろうか．我が研究室のDr. Mwaseが司会をしてくれた．今回ザンビアに来れたことへの感謝の後，「反芻獣免疫担当細胞の病理形態学；ウシ白血病の病理発生と予防」について講演した．ウシ白血病の紹介，反芻獣の免疫担当細胞の説明，ウシ白血病におけるリンパ球の種類，病理発生をふまえた予防法について講演し，最後にこの大学の発展と共同研究の推進を願って講演を締めくくった．質問としてはこのウイルスは人間に感染しないのか，ザンビアにこの病気は有るのか，なぜ感染牛のうち発症するものが少ないのか，何が発症の要因かなどについて質問があった．私の語学力の不足で充分意図が通じなかった恐れが有るが，一応皆に興味をもって聞いてもらったのではないかと感じている．

20．おわりに

カウンターパートのはバイアットは北海道大学で博士号を取得してきた人物で将来のこの大学を背負っていく人物の一人になるであろうと思われる．従って彼は既に高度な知識と技術を有しており，あまり教えることもなく，かえって私の方が教えられることの方が多かった．今回，輸送機材として各種病原体に対する抗体，染色試薬および機材を持参したので，今後，彼がそれらを用いて各種感染症の診断に活用してくれることであろう．これを機会に日本と共同でザンビアに存在する各種の病気について研究することは両国にとって有益である．私はあまりお役に立てなかったかもしれないが，今後この大学がますます発展することを希望する．

最後に，今回の派遣に際し大変お世話になった，国内委員会，JICA関係者，ザンビア大学のスタッフ，長期ならびに短期専門家および留守を守ってくれた教室員に心から感謝の意を表する．

「標本室へようこそ」あとがき

標本室には無数の標本がある。私は昭和五十三年に赴任して以来、獣医病理学の教材として使用するため何度となく標本室に入ったが、入る度に「こんな標本があったのか」と新しい発見があった。

しかし、標本数日本一のコレクションといわれながら、その量が膨大なため何がどれだけあるか不明であった。そこで文部省科学研究費の補助を得て平成六年に教室員総出で、標本室のたな卸しともいうべき作業を行った。平成七年一月に標本室の収蔵目録が完成し、平成八年四月には、そのデータをインターネットのホームページで公開した。

現在は何でもインターネットで調べられる時代であるが、当時はまだ珍しかった。岩手大学情報処理センターも、まだサーバーを引き受けられる状態ではなく、自前のパソコンをサーバー機として教室に設置し、二十四時間稼動させて標本室のホームページを発信した。平成九年には、その全文を英文化した。これで名実共に世界中から標本室を見る事ができるようになり、事実海外からの問い合わせも増加した。

これらの取り組みは新聞各社が報道してくれた。その際、盛岡タイムスの馬場さんから標本室の標本を一つずつ取り上げて新聞紙上に紹介してはいかがかと提案があったのだが、私のザンビア大学出張などが予定されていた時期で話はいったん立ち消えになった。

ザンビアから帰国して数年後、岩手大学にミュージアムを創ろうという気運が生まれてきた。大学には研究や教育のために収集された貴重な博物資料や学術資料が収蔵されているが、きちんと整理されているとは言い難い。研究の成果を広く一般に紹介する場も十分ではなかった。こうした資料の価値を再評価するミュージアム整備の一環として、標本室の内容を新聞に紹介してもらえるのであれば有り難いということで、この連載企画がスタートした。

記事にするとなると、病理標本が岩手大学に収蔵されたいきさつや当時の社会的な背景なども調べる必要がある。私は病理学の専門であるから病気の内容については説明できるが、いきさつなどは分からないことが多く、当時のことを知っている人から話を聞かなければならない。当初は私に文章を書いてほしいという事であったが、むしろ馬場さんに取材してもらったほうが良いということになった。

心当たりを探して、この人に聞いたら分かるでしょうと、色々な人を紹介し取材の許可をいただいた。中には高齢の方もいて、今考えてみれば、その時お話を聞いておかないと永遠にいきさつが分らなくなるということも多かったように思う。かくして馬場さんの地道な取材によりこの記事が出来上がった。なかには私の知らなかったことも多く、この記事から教えられることも少なくなかった。

題材は標本室にある二〇〇〇点の標本の中から記事としてまとめられそうなものを片っ端から選んだ。しかし、奇形など新聞記事としては相応しくないものもあり、それらはあえて取り上げなかった。まだまだ取り上げるべき題材はあるが、今回は一応の中締として一冊の単行本にした次第である。

私達の教室の正式な名前は応用獣医学講座である。しかし、これらの標本は家畜病理学教室の名前のもとに収集されたものであり、今回あえてこの名前を使用した。記事は平成十三年からスタートしても

う六年になる。取材のカメラも途中からデジカメに変わった。写真を載せるに当たり、膨大なネガフィルムからそれぞれのコマを探すのは容易でなく、新聞の掲載写真から起こしたものも多い。新聞の発行後に気がついたミスは今回修正したが、原則として元の記事のまま掲載した。発行にかかった費用は教室の研究費から支出した。

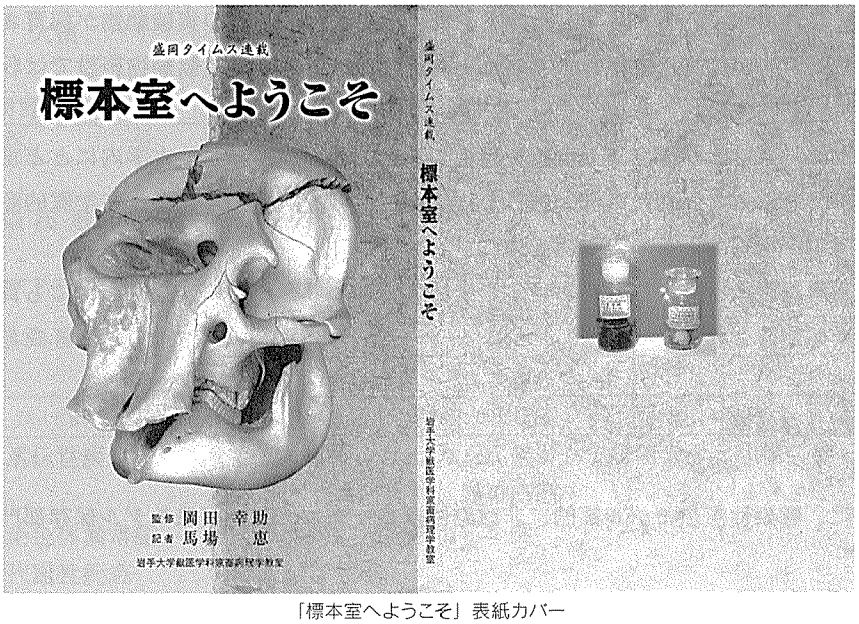
表題の「標本室へようこそ」は平成八年から発信したインターネットの表題による。先のサーバー機は十年間動き続けた事になり驚異に値するが、さすがに古くなり、度々ダウンするので、平成十八年四月から総合情報処理センターに移した。

本誌の始めに宮沢賢治の写真を載せたがなぜだろうと思われた方も多いと思う。これは彼の同人誌アザレアの文中に標本室が登場するからである。標本室は開学当初から一〇〇年以上の歴史を有し、賢治の時代にもこの標本室が存在していたことを証明するものである。

最後になったが、岩手大学ミュージアム研究員で標本室の守神ともいうべき沼宮内茂氏ならびに教室員各位、および取材に快く応じてくださった各位に心から感謝する。今後とも新しい標本の収集と整理がなされ、標本室が末永く維持され、本書の続編が発行できることを期待する。

平成十九年一月

岡　田　幸　助　記



「標本室へようこそ」表紙カバー